

ウイグル族の伝統医薬学及びその生薬

Traditional Uyghur Medicine and Herbal Drugs

馬麗亜 沙克木*

Mariya Sakim

I. ウイグル医学

1. 新疆の概説

新疆ウイグル自治区は中国の西北部に位置し、北からアルタイ山脈、天山山脈、クンロン山脈の3つの山脈とその間に広大なジュンガル盆地、タリム盆地を有する。この2つの盆地の大部分はクルバン・トングット砂漠と有名なタクラマカン砂漠で、自治区面積の25%が砂漠である。自治区内には320ほどの河川があり、比較的大きいものはタリム川、イリ川、イルテシ川などである。最大規模のタリム川が東方へ流れ、砂漠の東側で南に向きを変え、やがて砂漠の中へと消えていく。新疆には万年雪を抱く天山山脈、広大なタクラマカン砂漠、古来遊牧騎馬民族が割拠した大草原など自然環境はバラエティーに富み、気候変化も激しい地域である。

2. ウイグル医学の発生起源

ウイグル医学とは今の新疆ウイグル自治区に住んでいるウイグル族の人々が自らの伝統的治療や医薬に与えた名称である。

ウイグル医学の発祥と展開は、民族の祖先たちが暮らしてきた自然環境および社会状況の歴史的な変化と大きく連関している。とくに、新疆に入ってきた宗教とそれにともなう文化体系は、ウイグル医学の形成と発展の上で大きな影響を与えた。

現在の新疆ウイグルがトルコ化される以前からこの地域は「西域」と呼ばれ、紀元前西域に最初に流入したのはゾロアスター教である。その後、4世紀以降にソグド人の活躍によってマニ教が伝わり、当時の西域の国教となり、広く浸透した。これらの宗教が医学に対して果たした役割については、必ずしも明らかでない。

医学との関係で重要なのは、シャーマニズムの存在である。原始的な医術においては、呪術を中心と

した魔法医学が主流であり、「巫」（シャーマン）の存在が不可欠であった。「巫」と医術は不可分であった。「巫」は医術の分野に多く関与し、宗教の伝統に基づいた信仰治療、すなわち歌や踊りを利用した療法、呪術などが医療の方法として代々伝えられていった。次第に「巫」と医術は分離していったが、現在でも新疆の一部の村では、その痕跡をわずかに見ることができる。中には、迷信に近いものもあるが、逆に現代医学よりもすぐれた効能をもつ民間的なものも少なくない。ある時代、ウイグル族の中で医療と呪術は密接な関係にあり、治療術と宗教的儀式には共通点が多くあった。当初、人々の実体験により生まれてきた民間的知識は民間療法や信仰療法という形をとっていたが、時代がたつにつれ、哲学観や様々な理論をとり入れ、現在のような医学体系へと形が整えられていったと考えられる。

今日、世界的に西洋医学が浸透しつつある中で、ウイグル医学においては伝統的な知識が生き残り、西洋医学とともに民間薬や魔法の一端を担っている。次にウイグル医学の展開に大きな意味をもったのは、新疆における東西文化の交流を最も顕著に表している仏教の伝来である。仏教は、紀元前74年の頃、于田（今のホータン）にはじめて伝わり、その後カシュガル、クチャ、トゥルファンなどに広まった。仏教がこの地域に伝来したときは、信仰およびそれにともなう呪術による医療なども伝えられた。また、仏教の伝来とともにインドとの交流も活発化し、インド医術やアーユルヴェーダも浸透していった。

この地域は、10世紀あたりを継起としてイスラム化されるが、それ以前の医学体系についてはあまり記述がない。今世紀の初頭に盛んに行われた各国のいわゆる西域探検によって発見された豊富な資料の中に、トゥルファンの出土でベルリン博物館に保管されている、古代ウイグル文字で記された医学書の断片がある。Dr. G. R. Rachmati はこれを検討し、

*前 富山医科薬科大学和漢薬研究所附属薬効解析センター・客員助教授
現 中国新疆医科大学基礎医学部化学教研室・副教授

1930年～1932年にドイツ語訳を付して発表した。1936年、イスタンブール大学医学史学部の Dr. A. Suheyl Unver によりトルコ語で出版された。1997年、トルコ語から現代ウイグル語に訳された。この本に記されている治療法、薬の投与法、薬剤型や製剤道具、薬物は現在のウイグル医学と大きな差異がないものの、動物性薬物の割合が現在より多い。これはウイグル族の当時の生活の様相を反映しているのではないかと思われる。理論的には、現在のウイグル医学は四体液説を主張するが、これについては三体液説で述べられている。

タリム盆地のイスラム化は、980年に草原地帯からオアシス地帯に本拠を移したカラ・ハン朝の進出をきっかけとする。イスラム化以降、11世紀末から20世紀初めまで、ウイグルとアラビア、ペルシア、アフガンなどとの商隊貿易が盛んに行われた。それにとともに、文化、教育、医学、生薬などが伝わり、大きな影響を与えた。とくに、アラビア・イスラム文化の浸透とともに、ギリシア哲学論や医学知識が伝わり、アラビア医学が優勢となった。アル・ファラビー (872～950)、イブン・シーナ (980～1037)、アル・ラーズィー (854～930) らの医学理論が吸収され、ウイグル医学はアラビア医学の影響により大きく発展した。古代ウイグル語文献などはアラビア語に訳され、ウイグル族の学者は論文をアラビア語で著すようになった。現在の医師 (tibib) らが携えている医学書も、アラビア語やペルシア語で書かれている。現在のウイグル医学は、理論体系的には、アラビア医学に類似しているので、当地域がイスラム化されて以後に形成された体系であろうと思われる。

以上のようにこの地域には、ゾロアスター教、マニ教、シャーマニズム、仏教、キリスト教、イスラム教などが次々と伝播した。それにともなって流入した医療のうち最もすぐれた治療法がもたらされ、ウイグル医学の中にとりいれられた。その結果、新しい医術が誕生し、発展していったと考えられる。

3. ウイグル医学の基礎理論

広大な地域からの生活の知恵と体験の蓄積、そして他の民間医薬との交流によって形成されたウイグル伝統医学の理論体系は、四元素 (Arkan) 説、四体液 (Hilit) 説、気質 (Mizaj) 説、生命力 (Kuvvet) 説、人体 (解剖) 論、病因論、病類論、診断 (Tash'his) 説、諸器官説、飲食摂生法、保健及び予防学、治療

学、薬物学、製剤学からなっている。

自然界に存在するあらゆる物は、空・火・土・水の要素から構成され、この四つの間に存在する法則に従っていると考えられる。

人体の生理因子として四つの体液が存在し、それらは血液・黄胆液・黒胆液・粘液である。個々の人体の各々特有の体液構成を持っている。

気質 (Mizaj) は人体における動力因で、四元素を中心に構成されたものであり、自然界に存在するあらゆるものが気質を持っている。心臓の質は熱性、脳・脊髄・脂肪は湿寒性、肺と皮膚は中性、胆嚢は乾熱性、膀胱・骨は乾寒性、眼・腎臓・筋肉・腱と血管は湿熱性と推定される。

古いウイグル医書は気候と季節が人の健康に与える影響についても次のような見解を述べている。春の気候は湿熱であり、人体の体液が増え、血性病が起りやすくなる (傷など)。夏の気候は乾熱で、黄胆質的病が多い。秋の気候は乾寒で、昼は暑く、夜は寒いという気候のため、昼・夜の気温差が大きくなり、風邪、リウマチ、神経的な病が多く見られる。冬の気候は湿寒で、肺病、傷寒、関節の痛みが多い。

表 1. ウイグル伝統医学の基礎理論

四元素	空	火	土	水
四体液	血液	黄胆液	黒胆液	粘液
気質	湿熱	乾熱	乾寒	湿寒
季節	春	夏	秋	冬

4. 新疆ウイグル医学の現状

現在のウイグル医学は医療、製薬、教育、研究などの部門に分かれる。実際に38箇所のウイグル医病院が設立された。これらの病院の特徴として、医師やスタッフのほぼ全員がウイグル族中心となる。中には皮膚病 (尋常性白斑) などの治療のために入院する漢民族の患者の姿も見られる。

それぞれ病院には各科の診察室をはじめ入院部があり、内科、外科 (皮膚科、接骨科を含む)、婦人科などの臨床科からなっている。

ウイグル医学病院の医師には、父親及び先輩医師から直接医学を学んできた者と、特に若い医師に目立つのが新疆医科大学をはじめとする西洋医学の学校を卒業した者や、ホータンにあるウイグル医専門学校を卒業した者がいる。ウイグル医学の技術は主に師徒伝承形で伝えられている。

外来患者は一日に平均約20～50名で、一人当たり

の治療費用は10～50元となる。公務員は以前、自己負担の必要はなかったが、ここ5～6年前から自己負担を増やす方向にある。農民は以前から自己負担であったが、場所によって合作医療制度が設立されている。

各病院では伝統的診療の基本原則に従い、患者の体質、今までの症状、脈象、舌象などを考えながら、症状を弁別し、臨床医療を行う。この中に西洋医療の考えも5～10%の割合で含まれている。

それぞれの病院に特徴的な治療技術がある。ホータンとカシュガルは白癩瘋、牛皮癬、糖尿病、婦人病に、カルガリクは肝臓病、胆嚢病に、トゥルファン、トクスン、ピチャンは接骨や心血管病に独特の療法を持っている。皮膚科の白癩瘋や牛皮癬、慢性湿疹、神経性皮膚炎、糖尿病、婦人病、喘息などの治療には独自の特色がある。療法としては熱いものによって寒性の病を治し、寒いものによって熱性の病を治すという思想に基づいている。

各病院の薬局は生薬局と成薬局に分かれている。成薬局は付属薬工場が提供した製剤と他の病院の製剤を扱う。各病院のそれぞれ独特な製剤の他、共通した製剤として蜜膏剤、糖漿剤（シロップ）、蒸露剤、錠剤、散剤などが使われる。

ウイグル医学教育は国の教育体系として認められ、1984年11月ホータン市で新疆ウイグル自治区ウイグル医専門学校を建てることを中央衛生部と自治区政府が承認し、1987年に開校された。学校ではウイグル語で授業を行い、パキスタンのウルド語を外国語科目として教えている。医学部と薬学部がある。

5. 砂浴治療

ウイグル医学では治療医学として、植物、動物、鉱物性薬物療法と共に、様々な自然現象の物理性質を利用した治療を行っている。例えば日光浴、温泉、蒸気浴、砂浴、薬浴、音楽を聞くなどの療法も治療医学としての価値が認められている。ウイグルの伝統的な自然療法として砂浴治療を紹介したい。

砂浴治療は、長い歴史と豊かな治療経験を持つ。これは日光浴、発汗療法、マッサージなどをあわせたものである。新疆のトゥルファンやピチャンには砂を利用した治療を専門に行う「砂の病院」がある。治療時期は6月から8月までで、砂の深さ20～30cm、長さ1.5～2.0mの穴を掘り、患者の体を砂中に埋める。砂浴治療は関節炎や足、手、腰の痛みまた坐骨神経痛、寒性胃腸炎、白帯下病、高血圧病、

リウマチ、浮腫などに効果がある。砂浴治療が盛んな理由としてトゥルファンの独特な地形が挙げられる。トゥルファン盆地は群山に囲まれ、地勢が低く熱気が放散されないで、砂の温度が70～75度まであがる。さらに砂が熱を通すため埋められている患者の皮膚の温度が上がり、脈官が膨張し血行がよくなるので、新陳代謝が盛んになる。これは神経腺維の機能を高め、汗腺の働きを活発にし、老廃物の排出が早くなると考えられる。治療と同時に日光浴も兼ねることができる。この温熱効果の他にも砂に含まれる鉱物成分のもたらす効果、砂の磁性の効果もあると考えられている。

II. 他の伝統医学との関連

1. 治療方面における類似性

ウイグルの伝統医学の病理観は四体液による体液病理学説に基づいている。四体液のバランスが保たれている時には体は健康であり、その中のいずれかが過剰になると病気になると考えられている。

今日のウイグル伝統医学の治療では過剰な体液を「煮熟」して無毒化する薬である熟成剤（Munzij）をはじめに与え、次に無毒化した体液を排泄する薬瀉剤（Mus'hil）を与える。

熟成剤としてほとんどの場合に蜜（糖）剤を用いており、また稀にではあるが、熟成剤として蜜類や糖類を単味で使うこともある。次に漢方医学に少なく、ウイグル医学では多いに使われている蜜（糖）剤を紹介し、他の医学との関連を検討する。

①ウイグル伝統医学のこの治療方法を古代にあったウイグル医学及び他の医学と比較し、検討してみる

ウイグルの古医学に訳されたのはアーユルヴェーダと同様にバータ（風）、ピッタ（胆汁）、カパ（痰）の3体液を採っている。

この古医書の中には長期に保存しておけるような剤型の糖膏剤や糖漿剤は見られないものの、構成生薬に蜂蜜や砂糖液を服用時に混ぜる方法が数多く記されている。この剤型は用時に調整した糖膏剤や糖漿剤であり、糖剤の原型の一つとみなすことができる。

一つの例は蜂蜜液だけの処方である。ここではピッタ（胆汁）性熱病に対して、蜂蜜でピッタを緩和、無毒化しようとしている。

表2. ウイグル伝統医薬における蜜(糖)加剤

名 称	分 類	定 義
1. Majunat (蜜膏剤)	1. Hamiri 2. Itrifal 3. Ayarej 4. Tryaq 5. Jawarish 6. Majun 7. Mufarrih 8. Lubub 9. Laooq	構成生薬の粉末に蜜(氷砂糖, 糖)を加えて膏状にした剤型
2. 糖漿剤 (シロップ剤)	Sherbet	生薬の煎液や絞り汁に糖を加え, さらに煮詰めた液状の剤型
3. 醋蜜(糖)剤	Shirkanjbin	生薬の煎液に蜂蜜あるいは砂糖を加えさらに煮詰めてから醋を加えた製剤
4. ジャーム	Murabba	果物や生薬に砂糖を加え煮詰めた剤型
5. 糖花剤	Gul Qant	花や花びらに砂糖を加えて膏状とした剤型

チベット医学の『四部医典』の第一巻「根本の奥義」第5章「療治の方法」に①和らげ②浄める薬をつくる方法が述べられている。

『四部医典』における糖剤の使い方は糖に積聚性の体液を解体する働きを期待する点で, ウイグルの古医書のそれと一致している。四部医典における「和らげる薬」と「浄める薬」の概念は今日のウイグル医学で採用している「熟成剤」と「瀉剤」とによる治療法をそのまま適用して理解することができる。すなわち「和らげる薬」で悪性の体液を熟成, 無毒化させこれを「浄める薬」で体外に排泄させる。

②アーユルヴェーダに見られる糖剤

アーユルヴェーダの2大聖典である『チャラカ・サンヒター』, 『スシュルタ・サンヒター』の中には糖剤は随所に見られ, また蜜や糖を単味で用いる例も多い。

③ギリシア医学における糖剤

ギリシア医学の聖典である『ヒポクラテス全集』では糖を含む製剤はほとんど見られないが, 蜂蜜を服用, 特に混ぜて用いる方法が数多く記されている。これは, 肺膿瘍の治療例であるが, ここにおける蜂蜜の役割は化膿(熟成), 排膿を促し, 膿を吐かせることにあると見られる。

ローマ時代(紀元1世紀)の著作とされるプリニウスの『博物誌』やディオスコリデスの『薬物誌』に見られる糖剤や蜂蜜の記述も『ヒポクラテス全集』の内容に類している。

ギリシア医学に類似した病理観はアラビア医学の聖典イブン・シーナの『医学典範』にも記されている。

悪性の体液を「煮熟」し, 排泄させる点で, ギリシア, インド, アラブ, チベット, ウイグルの体液病理学説は共通している。

2. 書物に載せられた生薬の比較

ウイグル族の生薬の位置付けを明らかにするために④『ウイグル医常用薬材』, ③『ウイグル医常用薬材学』⑤『ウイグル医学の製剤学と複方学』に記された生薬名ならびにそれらの基原などを整理し, 中国, アラブ, パキスタンの伝統医学の薬物書に記された生薬と比較したい。

①中国伝統医学の薬物書との比較

中国最古の薬物書『神農本草経』に記載された360種類の生薬と上記④のウイグルの薬物書に記された434種類の生薬を比較した。比較には, 神農本草経の薬物に学名をあてて整理した『意訳神農本草経』(浜田善利, 1993)を用いた。その結果, ウイグルの薬物書④に記された434種類の薬物中, 『神農本草経』中に認められたものは39種類であった。このことから, ウイグルの伝統医学と中国の伝統医学の相違を薬物の面で確認することができた。

②アラブ医学の薬物書との比較

偉大なる医学者, イブン・シーナ(アヴィセンナ, 980-1037年)によって著わされた医学の聖典『医学

典範』(『カノン』)の第2巻には単味の薬物が収載されている。これら665種類の薬物中、282種類について、パキスタンのHakim Mohammd Saidらは学名を与えている(“Hmdard Pharmacopoeia of Eastern Medicine”, 1970)。この282種類中、130種類がウイグルの薬物書に認められ、さらに近縁のものも含めれば、282種類中の約65%がウイグルの薬物書と共通していた。

③パキスタンの薬物書との比較

パキスタンの薬草商で扱っている生薬を報告した“Herb and Herbalists in Pakistan”(K. Usmanhani et al., 1986)に収載された生薬とウイグルのものとを比較した。その結果、植物性の生薬に関しては、ウイグルで記録されているものの約50%が本書のものと一致した。

近縁のものも含めれば、その値は約85%近くに達する。

④パキスタンの剤型との比較

剤型名	Majun	Sherbet	Araq	Habb	Malham	Qursi
パキスタン	59	18	23	7	5	22
ウイグル	71	21	14	34	10	7

今回のデータベースの工作中、ウルムチ市にあるウイグル医学病院生薬局から集められた168種の生薬について検討した。

168種の中の9種は鉱物性、7種は動物性生薬でマメ科、セリ科、ショウガ科、キク科、シソ科、アブラナ科などに由来するものが多かった。また、植物性生薬を用部別に見ると、種子や果実を用いるものが最も多く(約40%)、一方地下部は約20%であり、漢薬との相違をうかがわせた。

生薬の効能の記述を検討した結果、過剰な体液の排泄を促す、体液の流通を妨げる、阻塞を除く、体液の流通を促して各臓器の機能を高めるといった体液病理学説に基づく記述が多いことが明らかになった。

その168種の生薬のデータ整理に参考となった『ウイグル医常用薬剤学』とパキスタンの『INDUS-YUNIC MEDICINE』の中の生薬名のデータを比較したところ、168種中145種の生薬名がパキスタンのものと一致した。

III. ウイグル医学における生薬

1. 気候と植物資源

ウイグル医学では多く生薬が処方されるが、そこで用いられる植物資源とその背景としての新疆の気候条件について、ここで一言述べておく。

新疆は、太平洋から3,000km、大西洋から5,000km、最も近いインド洋で約2,000km離れた、アジア大陸の中央部に位置する。海洋から遠く離れていることと、周囲の高山が障壁となっていることから、湿気を含んだ気流の流入が非常に少ないため、典型的な乾燥大陸性気候となっている。天山の南側の南疆の年間降水量は非常に少なく、5~80mm程度である。北側の北疆は北太平洋や北極海から山間部を縫って流れ込む気流の影響を受けて、100~250mm程度の雨量をもつ。また、降水量は標高によって異なり、北疆で標高2,000~3,000mの地域に最も多くなっている。雨量の少ない盆地のトゥルファンでは年間10mmにも満たない。地域と標高による降水量の違いは、植生分布を決定し、年毎の降水量の多少は植物の生長に大きな影響を与えている。降水量が少ないことと並んで、日射量がきわめて多く、年間蒸発量は北疆で1,500~2,300mm、南疆では2,000~3,400mmに達する。このことは、植物の生育にとって水が最大の制約要因であるということを示している。しかし、水の供給さえ確保できれば、豊富な日射量は新疆における植物資源の生育にとってプラス材料である。

ウイグル医学の薬物は、植物性、鉱物性、動物性薬物からなり、80%以上は植物に由来するものである。新疆の植物は3,400種類を数えるが、その中で薬用植物は151科607属1,160種に及ぶ。その分布と生長により、栽培と野生とに分類される。440種が畑や果樹園、庭、路傍などで栽培され、720種が高山、山麓、草原、砂漠、溪谷、水辺などに分布する野生植物である。現在までに600種以上の薬用植物が確認され、約360種が実際にウイグル医薬の中で利用されている。その他、140種は外国から輸入されたもので、その内100種は中国内地から入ってきたものである。

2. 生薬及び生薬屋

人類が生薬を自分たちの生活に役立てるようになったのは、人々の間から生まれた知恵のようである。古代どこでも伝統的医学は元来民間生薬から出発し

た。すなわち、人々は生薬を自家実験しながら医学を見いだしていったとも言えよう。あるいは、それぞれの民族集団は、独自に居住地域の薬物資源を利用しながら、人間生活文化の一つとして伝承医療の道を開いてきたと考えられる。

現在の全新疆には伝統的なウイグル医学病院のほかに、民間的な生薬を扱う独特の香が立ち込めた薬物香料商店が各地に存在する。これは、中東アジアのアッタールないしは薬種商店と同じもので、ホータンやカシュガルに盛んに見られる薬種商店は、ウイグル語で「ダールワール (Darival)」(「生薬屋」, 「くすり屋」) と呼ばれる。ウルムチでは薬種商店は「80袋屋」という名称で知られてきた。

全新疆、とくに南疆のバザールにはそれぞれ特有の匂いをもつ草、根、樹皮、木、種子、花、果実、果皮、茎、動物性物質、鉱物性物質の類いがそれぞれ袋に入れられ、香料薬物商の店頭で売られている。原型のまま今なお現役として売られているこれらの薬物が店頭に所狭しと並べられている様は、いかにも「生薬屋」(80袋屋) の名にふさわしい印象を与える。

生薬屋(80袋屋)は、言うまでもなく生薬を売る店であるが、単に薬を売るだけの場所ではない。客は自分の体調に合わせて、時に店の主人にも相談しながら自分で生薬を選ぶ。この生薬屋は、薬種や生

薬を扱うため、ウイグル伝統医薬学の中心的な存在である。店には香昧料も数多く、その中には歴史上も薬物として用いられてきたと言われているものが少なくない。「正倉院薬物」にも記載がみられる、無食子、巴豆、大黄、蜜陀草、麝香、甘草、芒消、胡椒なども売られている。店の扱う薬草、香料のほぼ3~4割は輸入である。薬物商は、国際的にきわめて広い範囲を舞台に展開してきた商売である。それらの知識は、自然や政治、宗教などの障壁を乗り越え、人々の交流の中で各地に伝播し、交錯し、浸透し合ってきた。シルクロードを介した活発な文化交流のため、ウイグル医薬には、漢方およびインド・アラビア医薬の影響も見られる。今でも、アラビアなどの原産地名の呼称をもつ薬物が民間でなれ親しまれており、店で扱う生薬名にもアラビア語、ペルシア語に由来するものが数多くある。これらの名称や薬効は、先祖代々伝え継がれている。

生薬屋は、薬物商として扱われることが多く、店の主人は医事法による医師や薬剤師の資格を持たない場合もあるし、反対に伝統的な医師として認められ、先祖伝来の店を子孫に継がせるようなケースもある。「解放」以来、1950~60年代頃、生薬業は自治区衛生局の管轄下にあり、その後食品局の所属になったが、現在は衛生局の管轄下にもどっている。